

# 論文内容の要約

放送大学大学院文化科学研究科  
文化科学専攻人文学プログラム  
2014年度入学  
(学生番号) 142-800005-3

ほりい けいこ  
堀井 恵子

## 1. 論文題目

学士課程教育におけるアカデミック・ジャパニーズ(AJ)・ビジネス日本語(BJ)教育の意義と課題

## 2. 論文要約

### 第1章 研究背景・目的・方法

本研究は、「アカデミック・ジャパニーズ」(以下、AJ)教育と「ビジネス日本語」(以下、BJ)教育が大学における学士課程教育において有する可能性を検討することを目的とした。第1章では、2002年の「日本留学試験」で登場したAJと、2006年の「アジア人財資金構想」に盛り込まれたBJの、発端から現在に至るまでの状況を振り返り、カリキュラムやそれぞれの理念的な面をめぐる研究的背景を概観した。AJ教育、BJ教育はともに、留学生の日本語教育として始まったが、留学生向けのスキル教育としての面に留まらず、論理的・批判的思考力や他者との協働的遂行力を涵養する側面がある。学士力・社会人基礎力の育成に寄与することで、学士課程教育全体にもたらす意義と課題があると考えられるにもかかわらず、そうした観点からアプローチする研究がないことを指摘した。研究課題としては、AJ教育、BJ教育の現状を把握して課題を抽出するとともに、AJ教育、BJ教育それぞれに期待される成果を具体的に・実的に探ることを通して、それらが大学の学士課程教育に対しどのような

な貢献をなし得るか考察した。研究方法は、先行研究の概観・レビュー、大学の教育担当者への質問紙調査を通して、課題を明らかにした後、AJ、BJ 教育実践における学習者の振り返り記述を分析し、考察、結論を導いた。

## 第2章 先行研究

研究目的に沿って、これまでの AJ、BJ に関する先行研究を概観し分析を行った。AJ の先行研究においては、日本語母語話者を含めた「大学における学びに必要な日本語力」を問うことで大学教育における言語教育としての AJ の果たす役割やその方法が検討されている。正解が 1 つではない問題発見解決能力を育む転換期教育となる AJ を身につけることは、大学での学習のみならず、卒業後の社会人となったときにも意味を持つことが述べられている。BJ の先行研究においては、「仕事をするために必要な日本語能力」には、待遇表現を含めたビジネス日本語の運用力、ビジネス文化・知識、グローバル人材としての能力、社会人基礎力の育成も重要であること、異文化調整力の育成も求められていることがわかった。教育方法として PBL(プロジェクト型学習)が推奨され、教員の役割もファシリテートへ転換することが求められているが、PBL の活用は十分には行われていない。AJ、BJ ともに研究の始まりでは、それまで問われて来なかった AJ、BJ 教育の理念が議論されているが、その後はどちらも日本語教育の研究領域の 1 つとなっているにもかかわらず、実践報告やスキル習得の方法をテーマとする研究が多く、なぜ AJ、BJ 教育が必要かという AJ、BJ の意義を問うものがないことが把握された。そこで、先行研究において、AJ、BJ 教育の構成要素として言及されている項目をキーワードとして抽出したうえで、具体的な項目(スキルなど)、目標となる抽象的な項目、それらをつなぐブリッジ項目に分類、ブリッジ項目に鍵があるのではと考察した。なお、AJ と BJ の教育カテゴリー的な位置付けについては、広義の「言語教育」であると考えた。

## 第3章 質問紙調査による現状把握

AJ、BJ 教育の現状を把握することが必要との認識に立ち、現に AJ や BJ が科目として提供されている大学の教育担当者への質問紙調査を行った。教育担当者の回答からは大学生にとって「大学で学ぶための基礎的能力」が大学入学以前にはほとんど身につけていないことから AJ 教育が必要であること、社会へのトランジション(移行)として BJ 教育が必要であることが了解された。また、AJ においては、論理的思考、批判的思考、問題発見解決能力、BJ においては、チームワーク、協働遂行能力、問題発見解決能力が涵養されるべき能力や活動のキーワードとして抽出された。自律的学習、アクティブラーニングがそれらを支えるものとして抽出された。これらのキーワードは第 2 章のキーワード分析でブリッジ項目として分類された要素と重なることがわかった。そして、単なる言葉の教育、コミュニケーションの教育を越え、よりよく生きるための教育として大学教育の中で日本人学生も含めた、AJ、BJ の両教育のアーティキュレーション(接続)の意義も認識された。一方、どちらもアクティブラーニングが必要であるが、それに対応できる教員が十分でないことから教員の資質不足、教員不足が課題として浮かび上がった。これらから、学部やコース・専攻等において設定されている目標や理念などの抽象度の高い次元と、学習項目として教育され習得されるスキルなど具体性の高い次元とが、接続されないまま乖離していることが、大きな課題の 1 つであるとの認識に至った。そこで、両次元を接続して乖離を埋めるところに、大学教育課程における AJ、BJ の意義を見いだせるのではないかとの洞察を得た。それを受け、続く 2 つの章では、それぞれ AJ 教育、BJ 教育によって涵養される、いわばそれらの目的と言ってもよい能力が何であるかを考察した。

#### 第4章 AJ(アカデミック・ジャパニーズ)教育の実践と意義

教育実践による検討として、AJ を育成するための「具体的な論点を挙げての発表・ディスカッション」と「卒論執筆」を中心とした日本人を主とするゼミにおける卒論までの AJ 教育実践としての学習活動を検討した。学生自身による

多量の振り返り記述を縦断的に分析した結果から、専門知識やアカデミック・スキルと合わせ、論理的思考、批判的思考、問題発見解決能力が育成されることが考察された。これらの能力は、単なる知識やスキルの次元でもなく、また抽象的な概念や目標の次元でもなく、教育実践の活動を通して習得されるその両者をつなぐものであるとの洞察が得られた。そうした意味を込めて、「活動・能力 (Activity–Ability)」と名付けた。また、これまで、AJ 教育については、大学の初年次教育として行った後はほとんど意識化されてこなかったが、本来の AJ 教育は初年次だけではなく、その後の大学教育の中で展開されることでこそ、真に習得されるものであるとの認識も得られた。

## 第 5 章 BJ(ビジネス日本語)教育の実践と意義

BJ 教育実践の検討として、筆者の PBL(プロジェクト型学習)を用いた 3 つの BJ 教育実践などについて、学習者の振り返り記述の分析から検討を行った。BJ 教育として、プロジェクトの達成(例:コンビニ新規商品企画など)を目指した一連のプロセスを経ることで、業務遂行全般に関わるビジネス日本語コミュニケーション、異文化調整力と合わせ、協働遂行能力、問題発見解決能力が総合的に育成されていることが考察された。これらは、ビジネスマナーやビジネス文書の書き方など研修やマニュアルによって習得可能なスキルとは異なり、前章で名付けた活動・能力 (Activity–Ability) の 1 つと言え、大学の学士課程で教育されるべき意義があると考えられるが、現状、これに対応する科目は見当たらない。

第 4 章、第 5 章における教育実践から得られた結果からは、AJ、BJ によって、具体的なスキルの次元でもなく、また抽象的・専門的な目標や理念の次元でもなく、教育実践の活動を通じて習得されそれらを橋渡しするものとして、活動・能力 (Activity–Ability) と名付けたものが育成された。AJ、BJ 教育の核心をこの次元に見るならば、留学生のみならず広く大学課程教育を通じて提供される意義があるとの洞察が得られた。

## 第6章 考察と結論—学士課程教育におけるAJ、BJ教育の意義と課題

6.1では、AJとBJの、また初年次教育や専門教育とAJ、BJとの、「アーティキュレーション(接続)」についての検討と、そうした接続の中でAJ、BJ教育を担う教師の資質についての検討を行った。AJ教育で身につけた論理的思考・批判的思考による問題発見解決能力を用い、BJ教育で身につけた他者との協働遂行能力で問題を発見し解決する行動力を育むことで、活動・能力(Activity-Ability)を軸として、AJとBJを学士課程教育の中で体系的に位置付けて展開することには大きな意義があると考えられる。しかし、AJ、BJ教育を担当する可能性の高い日本語教員の多くが、専門教育をも担当することが少ないことから、初年次教育や後年次教育において、専門教育とAJ、BJ教育のアーティキュレーションが必要であるが、その実現はなかなか難しい。また、現職日本語教師研修における受講生の振り返り記述を分析した結果、AJ、BJの教育に欠かせないアクティブラーニングやPBLを取り入れた教育実践の可能な教師が、圧倒的に不足している現状が見えた。アーティキュレーションの実現とAJ・BJ担当教員の養成は今後の課題となる。

最後に、これまでの各章の振り返りから以下を抽出した。

- ・ AJ、BJ教育が学士課程教育における広義の言語教育に資するためには、AJ、BJの具体的項目(知識・スキルなど)の学習だけでは十分ではない。主体的な活動によって涵養され具体と抽象を橋渡しする活動・能力(Activity-Ability)の習得が必要である。
- ・ AJの活動・能力(Activity-Ability)には論理的思考、批判的思考が、BJの活動・能力(Activity-Ability)には協働遂行能力などが挙げられる。AJ、BJ共通の活動・能力(Activity-Ability)としては問題発見解決能力が挙げられる。大学の学士課程教育における専門教育に並行した広義の言語教育として、論理的思考、批判的思考、協働遂行能力、そして、問題発見解決能力などの活動・能力(Activity-Ability)を育成することが可能な

点に AJ、BJ 教育の意義がある。

これまで、AJ 教育も BJ 教育も、学習項目となる知識やスキルに注目がいきがちで、その核心である活動・能力 (Activity-Ability) への焦点の当て方が十分ではなかったが、活動・能力 (Activity-Ability) 次元の重要性を再確認し、最も広義の言語的能力として AJ・BJ 教育は大学課程教育に組み込む価値を有するものと結論づけた。

ここで、本研究の限界を 2 点述べる。①ある教育の効果や優れていることを論じる場合、教育によって何が身についたかを、テストなどによる量的な数値指標で測ることで、客観的な根拠とすることが見られるが、本研究では、知識でも、スキルでもない活動・能力 (Activity-Ability) と名付けた力について、実践の記録を読み込むことによって論証を試みた。他の方法論を用いての検討は行っていないため、今後は他の手法や方法論を用いての研究が待たれる。②学士課程教育に入れることの意義を説いたが、実現に向けて考えていくと生じてくるであろう大小さまざまな課題があることは、ここでは論じていない。

これまでの学士課程教育では、外国語科目におけるスキル、教養科目における基礎知識、専門科目における専門知識といった具合に、スキルや知識の習得に比重が置かれてきた一方、それらを活用し実践につなげていくための広義の言語能力をめぐる議論は明らかに不足している。しかしながら、学士課程の目標として掲げられる学士力・社会人基礎力の習得には、知識やスキルにとどまらない能動的かつ創造的な能力が不可欠となる。そのためには、論理的思考・批判的思考、他者との協働遂行能力、そして、問題発見解決能力を体系的に身につけることが肝要なはずだが、現行の学士課程教育にはその受け皿が見当たらない。AJ 教育、BJ 教育とは、まさにそこを補って担うことのできる広義の言語教育であると考ええる。

知識やスキルではない活動・能力 (Activity-Ability) の育成には、アクティブラーニングによる主体的(自律的)・経験的な学びが求められる。そのための教員のパラダイムシフトや教員養成についてさらなる検討が必要である。門倉(2006)は、日本語教師が、日本語を総体的にとらえられる(教育内容)、インタ

ラクティブ(相互作用的)な教授法に習熟している(教育方法)、異文化間コミュニケーションをふまえる(教育姿勢)、の 3 点において優れていると述べているが、日本語教師の専門性を高め活用することに可能性が見いだせないだろうか。日本語教育の分野・視点であるからこそ、大学教育、そして、社会について、見えることがあるのではないだろうか。ひきつづき、この視点から、研究と実践を続けていきたい。

#### 参考文献

門倉正美(2006)「〈学びとコミュニケーション〉の日本語力アカデミック・ジャパニーズからの発信」『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房、3-20